

年間第十六主日

2020.7.19

マタイ 13・24-43

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今週も先週の主日に続いて、イエスが語られたたとえ話に耳を傾けました。

マタイ福音書13章に収められている、これらのいわゆるたとえ話は、わたしたちをガリラヤの湖のほとりに誘うような趣があります。あの湖の岸辺で、耳を傾ける大勢の人々に語りかけられたイエスの肉声が、わたしたちにもそのまま聞こえてくるように感じられはしないでしょうか。それほどに、イエスのこれらのたとえ話は、素朴な親しみやすさが感じられます。

福音書の中に収められたイエスのことばには、その時々々のイエスの思いが込められています。そして、それらのイエスのことばは、旧約聖書の中で、神のことばを告げた人々の声と響きあっているように感じられます。山上の説教のイエスのおことばは、シナイの山で神の示しを受け、それを人々に告げたモーセの声と響きあっています。律法学者やファリサイ派の人々を厳しく糾弾するイエスのおことばは、預言者たちが語ったことばを思い起こさせます。そして今日の福音のイエスのことばは、旧約の知恵の教師たちの語り方を彷彿とさせるところがあります。旧約聖書の中でこれらの人々を通して語りかけられた神は、今や新たに、その御子イエスを通してわたしたちに語りかけてくださっている、伝えられたイエスのおことばを福音書の中に書き残した人々の心の中には、そのような主イエスへの信仰が燃えていたのです。

旧約聖書の箴言やコヘレトのことばなどに集められた、いわゆる知恵の教師たちの教えは、ことわざやたとえや謎かけ問答を用いて、人々が日常的に経験している事柄に新たな目を向けさせます。そして、それらの日常的な経験の中に働いている神の導きのみ手に気付かせようとしみます。ガリラヤの湖のほとりに集った人々に語りかけられるイエスのおことばにも、そのような旧約聖書の中の知恵の教師たちの語り方の伝統が流れていることを感じ取ることができません。

それにしても、イエスはこれらのたとえ話をもって何を語ろうとしておられるのでしょうか。イエスのたとえ話の意味を悟る鍵は、これらのたとえ話を語られたイエスの中に隠されています。それゆえに、弟子たちがそうしたように、

わたしたちもイエスのもとに留まって、これらたとえ話でイエスが語ろうとされたことを学び続けなければなりません。今日の福音には、イエスのもとに残ったたとえ話の意味を尋ねた弟子たちにイエスがしてくださった解説の言葉が付け加えられています。けれども、イエスがあのとき弟子たちに解き明かしてくださった説明を聞いて、ああそういうことだったのかと分かったつもりになるだけでは、まだ本当には、これらのたとえを語られたイエスのお心のうちを理解できたとは言えません。

旧約の知恵の教師たちの教えが、日常的な経験を指し示しながら、それらを導いておられる神の大いなる計らいに人々の心の目を向けさせようとしたように、イエスの語られるたとえ話も、イエスとイエスに従う者たちが歩む現実の日々を導く神の大いなる計らいに対する信頼を説いているのです。

イエスの語られるたとえ話は、「天の国は次のようにたとえられる」というおことばで始まっています。イエスはこれらのたとえを用いて、天の国のありさまを語り聞かせようとしておられるのです。けれども、イエスが指し示す天の国のありさまとは、いわゆる天国のありさまなのではありません。

マタイ福音書のイエスの宣教の最初のおことばに戻って考えるなら、天の国とは、父なる神がその御子イエスによって、わたしたちの世界にもたらそうとしておられる天からの国です。イエスとイエスに従う者たちが歩む日々は、最終的にはわたしたちを天の国に招き入れる、神の大いなる救いの御計画の実現を目指して歩む日々です。イエスは御自分と御自分に従う者たちが歩むその日々を、種まきから始まり収穫に至る神の畑のいのちの営みにたとえておられるのです。

忘れることの出来ない、鮮明の記憶になって残る、イエスが語られたこれらのたとえ話を思い起こすたびに、イエスに従う者たちは、自分たちが歩む日々が、どのような障害に阻まれようとも、イエスによってもたらされた天の国の喜びに満ちた収穫を目指すものであることを新たな喜びと深い安らぎをもって受け入れることができるのです。

今日の福音の最初に語られている「毒麦のたとえ話」はイエスとイエスに従う者たちが歩む現実の日々に光を投げかけています。「畑にはよい種をお播きになったはずなのに、どこから毒麦が入ったのでしょうか」という僕たちの問いは、旧約の知恵の教師たちが取り組んだ最も大きな難問です。神を信じる者たちにとって、その信仰を揺るがす最大の難問は、神がこの世界を創造され、そ

の歩みを導いておられるのなら、何故、わたしたちの現実の世界の中には明らかに理不尽な悪が存在するのかという、現実が突きつけてくる問いです。知恵の教師たちがその総力を挙げて生み出した旧約のヨブ記は、この難問に立ち向かうことによって生み出された作品です。何故、神の掟に申し分なく従い通して、神の豊かな祝福の中に生きていた義人ヨブが、突然運命の逆転とも言える悲劇に巻き込まれなければならなかったのか。ヨブに何の落ち度があったから、あのような神の罰ともいえる苦難の中に突き落とされなければならなかったのか。主人公のヨブは、そのことを神に向かって問い続けます。主人公のヨブを通して、知恵の教師たちは自分たちの知恵の限界を告白しているのです。日常の経験の中に働く神の大いなる計らいを信じ、そのことを人々に教えてきた知恵の教師たちは、信仰に基づく自分たちの知恵によっても解くことのできない問題がこの世に存在することを認めたのです。けれども、それが知恵の教師たちが見出した最終結論なのではありません。むしろ、そのような人間の知恵をもってしては解き得ない難問に誠心誠意向き合うことによって、彼らは神を信じるとはどのようなことであるかということをおわたしたちに示しているのです。人間の知恵は、たとえそれが信仰に基づく最良の知恵であっても、神の大いなる計らいの全てを悟ることは出来ないことをおわたしたちに示しているのです。その事実を認め受け入れることが、人間にとっての最良の知恵あり、信仰とはまさにそのような行為であることを、知恵の教師たちはおわたしたちに告げているのです。「神を畏れることは知恵の始め」という箴言の最初に掲げられていることばは、旧約の知恵の教師たちのおわたしたちへのメッセージを集約しています。

「行って、毒麦を抜き集めておきましょうか」と言う^{しもべ}僕たちに対する主人の返答は、イエスに従うおわたしたちへのイエスのおことばそのものです。イエスによっておわたしたちにもたらされた天の国は、イエスのこのおことばのもとにあります。天の国の完成の日に向けておわたしたちの先頭に立っておわたしたちを導かれるイエスは、十字架の死を越えて復活された主イエスです。イエスの復活において示された、天の国の完成の日に向けて、おわたしたちもこの世の全てを神に大いなる計らいのみ手に委ねて、今はおわたしたちに理解にあまるこの世の日々を歩み続けるための、神を畏れる、それこそ真の知恵の恵みを祈り求めたいと思います。